

第4回滋賀県総合教育会議 会議録

1 日時

平成27年9月4日（金） 17：30～19：30

2 場所

滋賀県庁北新館5-A会議室

3 出席者

三日月知事、藤田委員長、土井委員、河上委員、佐藤委員、宇野委員、河原教育長

【事務方】勝身理事、水上教育次長、浅見管理監、森管理監、川崎管理監、

佐藤教育総務課長、望月企画室長（司会）、安藤特別支援教育室長、

辻本教職員課長、岩谷学校教育課長、佐敷学校教育課主席参事、

梅本生徒指導・いじめ対策支援室長、藤堂人権教育課長、

山崎生涯学習課長、馬淵副参事

（教育総務課）河井企画員、菊池主幹、高田主任主事、廣沢教育企画

主事（教職員課）田中参事、西嶋参事、今井参事（学校教育課）檀原

参事、辻本参事、西川主幹、中村主幹、臼井主査、村田主査

4 開会～

司 会

皆さん、本日はお集まりいただきましてありがとうございます。定刻となりましたので、ただ今から第4回滋賀県総合教育会議を開催いたします。配布資料につきましては、皆さまのお手元にお配りしております次第のとおりでございますのでご確認ください。

本日の会議は「学ぶ力」をテーマに議論をしていきたいと考えております。まずは、先日公表されました今年度の全国学力学習状況調査について、結果やこれまでの施策の検証等を踏まえて意見交換をしていきたいというふうに考えております。併せて、学ぶ力については、当然、高校教育あるいは英語教育などにも関係があります。次年度以降に重点的に講ずべき施策をテーマに、これまで第2回から順次、今の取り組み状況をご紹介いただきながら話題を共有して考えていきたいと思いますということでやっておりますので、まだできていない部分として高校教育についてもしていきたいというふうに思っておりますので、今後の教育施策について皆さまから議論いただきながら考えていきたいというふうに思っております。

それでは本日の会議を始めていきたいと思いますが、運営要綱第三条第一項により、この会議の司会を知事が行うこととされておりますが、前回、知事より司会は事務局の方でということでしたので、今回も、私、企画室の望月が司会をさせていただきます。どうぞよろしくお願い致します。

それでは開会に当たりまして、知事から一言ご挨拶いただけますでしょうか。

三日月知事

皆さん、こんにちは。金曜日の17時半という大変お忙しいところを今回もご参集いただきましてありがとうございます。教育委員長、教育長はじめ教育委員の皆さま方、教育委員会の事務局の皆さま方、日ごろの精力的な滋賀県教育に対しますお取り組みに心から敬意を表し感謝を申し上げたいと思います。ありがとうございます。今日は傍聴の方もお出でですので、是非、限られた時間ではありますがけれども、本県の教育に関する様々な課題等をお互いに共有しながら、今後の方策を考えていきたいと思います。

嬉しいことが数点ございまして、一つは先般もお話しましたけれども、高校総文「2015 滋賀 びわこ総文」、お陰さまで大盛会でございま

した。高校生諸君が本当に頑張ってくれましたし、先生方も寄り添って盛り上げてくださいました。その高校総文に参加した、ある高校生からお手紙をいただきまして、茶道をされている高校生だったんですけれども、やって良かった、やってくださってありがとうございます、茶道がますます好きになった、全国の高校生と仲間になれて良かったというお手紙を貰いましたし、苦勞したけれども、準備が大変だったけれどもやって良かったという、そういう内容でした。そういうことを感じてくれたことが嬉しかったですし、そういうことを感謝の気持ちで知事に手紙を書こうと思ってくれた、先生のご指導もあったのかもしれませんが、その心が嬉しかった。早速、返事を書いてこれからも一緒に頑張ろうということを申し上げた次第であります。

もう一つは、この夏休みの間に、全ての子どもたちではないんですけれども、小学生、中学生と一緒に語る機会を作っていただきました。それぞれの立場で人生を良くしたい、地域を良くしたい、学校を良くしたいと、まず滋賀県を良くしたいという思いを、この後ろのボードも小学生との対話の中で作っていただいたのですが、そういう提案もございました。これから秋にかけて高校生とも対話をいたしますが、これからの時代を作っていくのは、それぞれ子どもたち、また高校生、青年たちだという気持ちで呼びかけて、なにか大人が子どもに言うといった上から目線ではなくて一緒に考えるという、こういう姿勢を皆さんと一緒に持っていきたいなと思いますのでお願いいたします。

一方で課題もあると思ってまして、一つは、他国に目を向ければ、欧州、アフリカ等々で難民と言われる方々が国境を越えて移動され、子どもたちが、やはり弱い立場のまだまだ力の乏しい子どもたちが被害に遭うという、こういう状況を私たちはどう考えるのかということがございますし、他府県のことではありますけれども、13歳の少年少女が残念な人生の終わりを迎えてしまうという、こういう事態が発生いたしました。社会全体で、その子どもたちの育ちというものをしっかりと捉え考えていく必要があるだろうと思います。貧困や虐待で苦しい状況に置かれてしまっている子どもたちのことも、私たちは忘れてはなりません。

また先週、高島市の安曇川中野というところに1週間、移住滞在をさせていただいたのですが、その地区の小学校は今年度で廃校ということでございました、その学校に通う小学校5年生が、意を決して私に対して「知事さん、僕はこの学校で卒業したい。ただ、先生も大人も納得したことだから僕は上級生なんで従うけれども、この割り切れない気持ちを分かってほしい。」という、胸にジンとくる、そういう言葉を投げかけてくれました。もちろん人口減少、生徒減、その中で充実した教育を

という中で、一定のそういう方向もあるのかもしれませんが、こういうことに対してこれからどう向き合っていくのかということも大きな課題だと思います。

そして最後に、なんと言いましても今年行われました学力・学習状況調査の結果がいよいよ出まして、子どもは平均正答率の高い低いで順番に並べて一喜一憂するものではございませんが、滋賀県として、教育委員長はじめ皆さま方にお作りいただきました、学ぶ力向上の取り組みは、今まさに進めているところでございますので、しっかりとどういったところに課題があったのかということを検証しながら、既に取り組みは始めている施策との関係がどうだったのかということも分析して、子どもたちのため、将来のために一緒に頑張っていきたいと思います。

少し長くなりましたけれども、今日、こういう場を持っていただきましたこと、またこの特別支援学校の生徒の諸君も、こういう会を盛り上げるために、いろいろとお力添えをいただいたことにも感謝申し上げて冒頭の挨拶とさせていただきます。よろしくお願いいたします。

5 本県における学ぶ力向上施策について

司 会

ありがとうございました。それでは早速ですけれども、一つ目の議題『本県における学ぶ力向上施策について』に入りたいと思います。その議題では、特に全国学力・学習状況調査の結果を踏まえて、学ぶ力向上施策の検証等について議論をしていきたいと考えております。それでは最初に事務局から、先日結果が公表されました調査結果についてご説明をいただけますでしょうか。

学校教育課主席参事

(資料1 前半に基づき説明)

三日月知事

特に今回の結果を受けて、委員の皆さんはどういうふうにお考えでしょうか。

藤田委員長

それでは、私の方から少しお話をさせていただきたいと思います。

ただ今、事務局のほうから説明がありましたとおりで、この1年間、昨年の反省を踏まえて、随分と現場の方で取り組んでいただいたと思います。そういう意味からは、ちょっと残念ですけれども、今年も全国の平均から下回っていました。しかし、改善していく方向への努力が、一定の結果としては現れてきていますし、これは一朝一夕に直ぐ改善できるものではありませんので、この改善傾向が今後とも持続的に加速していくって、一定の成果に繋がっていくのではないかと思います。学ぶ力というものは、大人になっていく時の大事な必要条件だと思います。この学ぶ力を基礎として、将来大人になった時に、本人の人間力がさらに成長していくためには、どうしても一定の学力を有するということが大事なことでありますので、この改善傾向を更に進めて、滋賀らしいという、知事もおっしゃっているようなところを含めて改善していくということが重要な課題だと認識しております。宇野先生、今の説明に対して、なにかありますでしょうか。

宇野委員

学力調査の結果は、非常に厳粛に受け止める必要があるかと思います。知事がおっしゃった学ぶ力を構成する要素の一つにしかすぎないのではありませんが、この結果が公表されて県民の皆さまは不安を感じておられるでしょうし、不満にも思われていると思います。ただ私ども教育委員会や現場の教員も、やはり学力調査の点数は良い点をとりたいという

気持ちは同じだと思いますので、「生きる力」とか「学ぶ力」を構成する一つとして、学力調査のデータを分析して今後の方針というのを決めていく必要があるのではないかと思います。

土井委員

では、私の方からも。今回の調査結果は結果として重く受け止める必要があると思います。ただ、この結果を受け止める際に、いくつか気をつけなければならない点があると思います。第一に、この調査は、非常に限られた能力の測定のために、限られた科目について実施しているものです。子どもたちの学力を全般にわたって広く測定するものではなく、もともとこれは教育改善のための調査ですので、小学校、中学校の教育をこういう方向で進めていきたいという目標があって、それに向かってどう取り組んでいくのかを検証するためのものです。従って、その目標の範囲内で、ごく限られた能力を見ています。

それから、第二に、47都道府県を順位で並べると新聞報道のような形になりますが、今日の資料でも出ているように、例えば国語のA問題についても全国の平均正答率が70.0で、他方、滋賀県は順位が芳しくないから、ずっと低い正答率かということ、68.6なのです。実は、非常に狭い範囲の中に多くの都道府県が集まっている、そうした中で順番が付いているということです。ですから、都道府県が47ある以上は、1番から47番までできるわけですが、では1番から47番まで開いているのだから、46点の差があるのかということ、そういう訳では決してありません。非常に狭い範囲で集中しているところを踏まえる必要があります。

次に、学力向上のための対応策ですが、本県は「学ぶ力向上 滋賀プラン」という形で打ち出したわけです。これは小手先の対応ではなく、ある意味で抜本的なやり方です。学ぶ力をどう身につけさせるか、それに向かって全体的な教育改善をどう図っていくかという打ち出し方をしたわけです。こういう打ち出し方をした以上は、実は現場の先生方が、その目標を十分に共有していただいて、その取り組みが全体的に進んだ中で全体的な学力の向上が図られるという方策を選択したということになります。もちろん、見かけの点数を上げるために、小手先の対応として受験指導的なやり方はあるのだと思いますが、それでは教育改善には繋がらないので、王道を、つまり、この調査の本来の目的に従って教育改善を進める方向を選んだということです。従って、今後やはり学校現場の先生方に、その目標を十分理解していただいて、それが現実に軌道に乗って動く中で、自ずから結果が出てくるということだと思います。今回の結果は、結果として重く受け止めなければなら

ないと思いますが、だからといって今までの方針を大きく転換することになると、ただ混乱を引き起こすだけになりますので、できる限りきちんと現場の先生方に目標を共有していただいて取り組んでいただく方向で進めていくべきだろうと思っております。

河上委員

私も思うのですが、順位というのは今、土井委員が言われたように、本当に一点、二点のところにとくさんの県が集まっていると思います。従って、順位というのは、そんなにこだわらず、順位は確かに上がりましたけれども、一旦横に置いておいて、今、滋賀県が進めている学ぶ力の向上を進めることが大事です。分からない子どもを分かるようにするという、そこに力を入れるべきだと思います。特に学力の低い子どもさんが分かるようになる、そして地に足をつけた毎日、その歩みができるようになる。今、滋賀県は体力も無いとか学力も無いとかいろいろと言われているのですが、この方向で進めていければ、きっと好循環が生まれてくると思うのですね。

今、やはり先生方もたいへん危機感を持って取り組んでいただいていると思います。従ってこの歩みをやめてしまい、即効性のあることを求めてしまうと、やはり難しくなると思います。少し先をしっかりと見つめた形で進めていくのがいいのではないかなと思います。特に気になるところは、まだまだ生活習慣の部分で、子どもたちが1日に2時間3時間ゲームをしたりとか、テレビを見たりとかというところがあまり改善されていないように思います。そういうところは、保護者の方にもしっかりと考えていただいて、学校の先生だけでなく保護者さんも皆が一緒になって取り組んでいけたらいいのではないかと思います。

佐藤委員

点数を取るということに関しては、私は企業人ですので、どうしても売り上げ、利益というのは追及しがちになってしまいますけれども、どうしてもそうするとお客様目線で見えなくなってしまうことがあります。この滋賀県の滋賀らしさを考えた時、学ぶ力、生きる力ということ考えた時に、子どもたちがどういう人生を歩みたいんだ、どういう人間になりたいんだ、どういう将来を、夢を持って描いていきたいんだということを形にしてあげたいと願っているのが、我々教育委員会の今の立ち位置だと思っています。そうした時に、決して点数だけではない、でもそれを地道にコツコツ一つ一つ積み重ねていくこと、基礎を大切にすること、スポーツでも同じだと思いますが、だからこそ大技ができてくるのだと思いますので、そこを大切にすることによって、先生も含めて、親御さんも含めてそうだと思うのですが、子どもたちが共通して自

信を持って、これが滋賀県の良さなのだとと言えるようなものにするためにも、やはり地道にある程度の危機感を感じながら、計画を立ててやっていく必要があると思います。短期なのか中期なのか、それぞれ学校によっても変わってくるかと思いますが、ある程度、その基礎学力を上げる、点数を上げるということも意識はしていけないといけないなということとは非常に感じました。

他の都道府県さんを見ていると、確かに僅かな点数の差で順位がついているので、かなり大きな成果を出されているところを見てみますと、要は地道に取り組んで計画を皆で共有できるよう周知をしてきたという、非常に努力をなさっているところがあるかと思います。まさに滋賀県はこれからその形が成績としてみえてくる、結果としてみえてくるころだと思いますが、今年の結果としては、真摯に受け止めるべきですけども、残念だったと思っております。

河原教育長

今回の結果を知った時に、まずいろいろなデータをしっかりと見ると、ここから読み取れることが多いと感じました。また、学ぶ力のいわゆる6つの視点につきましても、この分析から非常にいろいろなことが見えてくるというような形で分析をしていただきました。特に2ページのところで、このグラフの方を見ました時に、まず平成25年のところで小学校でいえば大きく下がったのですが、この時に言語力、まず国語の力を付けようということで、各先生方をお願いしましたところ、次の年に大幅に国語の力が上がりました。更にその次の年は、算数の力がやはりまだまだではないか、もっと思考力を伸ばせるような、そういう授業展開をしましょうということを先生方に申し上げました。その結果、今回、B問題の成績が上がっているという結果になりました。やはりしっかりと目標を現場と共有してやっていけば、上がってくるかなということを感じました。ただ、このデータの中で、やはり算数Aが3年間、これは本当に不思議なことなのですが、ずっと全国と同じ差が続いておりまして、あまり改善が見られなかったというところがあります。その中で、やはり算数Aが上がらないというのは、思考力、判断力を高めるということもものすごく重要ですけども、ある意味でコツコツと、繰り返し、繰り返しやるというような、そういう勉強の仕方、基礎・基本を徹底的にしっかりとやるというところが、まだ足りないということを示しているのかなと思いました。また、6つの視点に分けて分析をするということで、学ぶ力向上プランを立ち上げましたけれども、そのプランを6つの視点で分けますと、やはりこれもデータというものが有効かなと思います。

特に授業改善でありますとか、国から示される先ほどのルールといったところは、昨年度から比べますと大きく向上しているところです。ただ全国と比べると、まだ足りないと思います。やはりここを、もっとしっかりやっていかなければならないと思いますが、これが改善しているということは、各学校が意識しているということです。このまま頑張っ続けていただけたらと思っております。ただ、放課後の時間のところなどにつきましては、小学校の場合は、まだ全国との差が昨年よりも悪化しているというようなこともありまして、このあたりのデータをしっかりと分析をしながら、しっかりと協議し、先ほどもお話がありましたように、今後も先生方と同じ目標値、そこを共有しながら一緒になって頑張っって上げていかなければならないと思いました。ありがとうございます。

三日月知事

それぞれの先生方からご意見をいただきましてありがとうございます。総括すると、「改善も見られたが、全国平均を全てにおいて下回っている」ということですね。ある県議会の会派から、結果をどう思ったかと問われ、数秒の間において「「そうかー」という印象でした」という答えをしたのですが。私は、3 ページ、4 ページをちょっとじっくり見えています。まず3 ページは小学校の、皆さんと一緒に作っていただいた『学ぶ力をはぐくむための』ということで、6つの視点を作って。これは小学校の児童が答える評価に基づいて作ったものです。これ見ていただきますと、ちょっと数字は分かりにくいですが、左側が平成 26 年度。その右側が今年。一番右側が去年から今年どうなったか。そういうところでいきますと、例えば大きな二項目目、繰り返し努力したことを認め、能力や可能性を引き出せたかというところ、これ 11.4 ポイント上がってるんです。その下、授業改善できたかというところ、31.5 ポイントも上がってるんです。そういう意味では、一定それぞれの現場で努力していただけてるんだと思うんですが、その下、放課後や家での時間の使い方を考えられてるかっていうところ、いろんな要素があるんでしょうけども、昨年よりも 0.3 ポイント下がっている。もっと注目したいのは、その左側なんです。全国との差というところをみますと、繰り返し努力したことを認め、能力や可能性を引き出せているかというところ、やはりなお、全国との差で 20.2 ポイントマイナスなんです。そして、その下の下、授業についてはどうかということでは、23.5 ポイントマイナスなんです。ここを注目ですね。そして1枚めくっていただいて4 ページのところを見ていただきますと、大体同じような傾向なんですけど、繰り返し努力したことを認め、能力や可能性を引き出せているかというところ、10.6 ポイント昨年よりも改善してるんですが、なお全国との差におい

てはマイナス 32.8 ポイント低いということでもありますとか。授業の改善では、37.1 ポイント改善してるんです。しかし、全国との差で 42.7 ポイントも低いということなんですね。こういうことを受けまして、私は教育委員会の事務局の皆さんにも四つのことを更に深く分析しようと申し上げたところです。基本は、委員の先生方にも言っていたように、引き続き学ぶ力向上をと委員長にも言っていたきましたが、一朝一夕には改善しないので、粘り強くやろうということです。

一つ目は、個々の子どもたちがどういう状況にあるのか。また、土日放課後の使い方で、もっと工夫改善の余地があるのではないかとということ。二つ目は、河上委員もおっしゃっていただきましたが、分からない子ども、もしくは分からないところに対する手当てはどうなっているのかなということ、もうちょっと詳しく見ようではないか。また、授業の工夫と改善は、大いに現場でも努力していただいているのですが、まだまだやることのあるのではないだろうか。例えば授業の最初に狙い、目当て。授業が終わったあとのポイントの振り返り。ここがポイントだということがしっかりと言えているかどうか、示せているかどうか。更には、おもしろさという問題。社会に出た時に、どうやって活かすのかということへの言及が、少し全国に比べて低いのではないだろうかということ。

四つ目は、読む力の読書との兼ね合いですね。この四つの視点で見ようということ、私自身も見るのが教育委員会にもお願いをしまして、更にこれを細分化して五つ。自分なりに分析して、一つは、大きく改善・向上したところはどこだろうか。市町もそうですし、他府県も。ここの取り組み見ようではないかということ。二つ目は、底上げできたところはどこか、「分からへん子が多かったんやけど、なんか結構、分かるようになったわ」とか、そういうところはどんなところで、どんな取り組みしたのだろうかということ。三つ目は、昨年度パワーアップ等々で補正予算にも認めていただいて、対策を講じたところがございますので、そういったところは、どんな結果になっているだろうか。四つ目は、授業の課題、工夫と改善の余地があるといいながら、例えば、落ち着き具合がどうなのかとか、先生の力、余裕度を含めてどうなのだろうかといったところですね。五つ目は、理科。3年に一度、理科の調査をやっているのですが、今回、理科が悪かった。特に中学校で、非常に落ち込んだ。これだけモノづくりの県でありながら、琵琶湖がありながら、なんで理科ができないのかなということですね。ちょっとよくお互い分析しようというふうに思います。ちょっと各論になりましたけれども、こういうことをお願いしながら今、分析をやっていただ

いております。今日、その一定の分析を皆さま方にお示しいただいたと思います。とはいえ、これだけではいけないということで、今日、5ページ以降に、更に昨年度に一部で取り組んだところの成果や、今、私が申し上げた大きく改善した都道府県での取り組み例も、現時点で分かることをちょっとお示しいただきましたので、もしよろしければ事務局のほうから、少し詳細にご説明いただければと思います。

司 会 五つのうち三つ目にありましたように、パワーアップ等、去年予算をつけてやったことについて事務局から説明をさせていただきます。

学校教育課主席参事 (資料1 後半に基づき説明)

三 日 月 知 事 今、ご説明いただいたように、去年から今年にかけ、知事としても議会でいろいろと問われ、各地域でもいろいろなご意見を伺い、いろいろと考えてきた上で今年の結果を見た時に、私はこんなふうに思いました。伸びるはずなのに伸ばせてやれていないのではないか。分かるはずなのに分からないまま、難しいなというまま時間が過ぎ、卒業させてしまっただろうか。もっとできることがあるのではないかと。

ある意味では良質の危機感と使命感を持って、去年のこの時期よりも更に踏み込んだ分析を、事務局にお願いをしてやっていただきました。そういう意味で、先ほど土井先生がおっしゃったように、現場との共有、現場の力合わせというようなことで、例えば他府県の事例などを見ると、かなりそういうことをしているということが分かりました。今回、正答率を大きく上げてきた市町などは、やはりそういう現場での取り組みの一定の成果があるのではないだろうかと思います。また9ページを見ていただきますと、ちょっと分かりにくいグラフですが、学ぶ力パワーアップ事業をしていこうということで、これについては15校のうち左側の5校は、ちょっとまだ結果が出ていませんが、右側の「～5」というところが15分の10。右側の中学校でいきますと、一番左の2校は、まだちょっと結果が出ていませんが、右側の7校のうち5校は、少し伸びが見られたということでもあります。10ページの放課後等活用事業は、まだちょっと取り組み初年度ということもあって、37校中の17校でしか伸びが見られず、37校中の20校で、まだちょっと結果が出ていないという状況であります。こういうことも詳細に分析しながら、現場、社会とも一体となって、また、先ほど、最後におっしゃっていただいたよ

うに、もう昨日から市町の担当者の方々や現場の方々に来ていただいて、他府県の事例などもよく共有しながら伸ばしていこう、もっとやる気を持たせてやろうということをしていただいています。こういうところを是非、昨年以上に取り組んでいきたいなと思っております。今の詳細な分析結果を受けて、何かご意見等がございましたらお願いします。

藤田委員長

はい。今、知事からコメントをいただきましたが、私たち教育委員会も、この課題にはかなり真剣に取り組んで参りましたし、この結果からどこが改善されているかを分析し、今後でも取り組んでいくつもりです。今おっしゃっていただいたところもいくつかありますが、やはり他府県も同じように問題意識を持って取り組んでおられるという状況です。先ほど紹介があった他府県の取り組みのところを見てもお分かりいただけますように、これが課題の教科だなというところに対して、相当フォーカスというか、絞って他府県は頑張っているような印象もあります。

本県につきましては、個々には活動、結果が上向いた要因と伸びなかった要因というところがあると思いますが、全体的に大きな意識の中で、全体的に上向いている、改善の傾向が出てきております。その背景には、やはり意識が、現場の先生方が教育のプロとして意識を非常に強く持って取り組んでおられることが、うまく絡んでいっているところでは結果につながっているし、伸びなかった要因のところは、やはり意識がまだ十分噛み合っていないような気がしますね。そういった部分がまだ少しあるような気がします。

そのあたりが徐々に改善されて、少しスピード感を持って取り組んでいければと思いますが、そうは言いましても点数は一点、二点、三点で数点の差です。ですから知事のおっしゃっている、本当はできるのだろうけれども、こうやったらもうちょっとできるというところに近いところまで皆が気付きかけている、まだ今、その矢先のところでこの結果になっているのではないかという気がいたします。いずれにしても、緊張感を持ってこれからも改善していかなければいけませんので、頑張りたいと思っています。

土井委員

先ほど申し上げましたように、状況はしっかりと受け止めるべきです。私自身は、順位は結果を相対的に評価したものですから、むしろ、例え

ば、国語のAについて滋賀県の小学校で正答率が68.6だとか、算数については72.7という事実自体をしっかり受け止めることが重要だと思います。大切なのは、やはり「できない子」、「わからない子」がいるということですよね。順位を上げることに目標を置いてしまうと、手段を誤ると思うのです。根本は、「できない子」、「わからない子」が目の前にいる、その子をできるように、わかるようにしてやらないといけない。これは、教育の本来の目的であるし、先生方の教育の専門家としてのプライドだと思うのです。改善を進めるやり方については、現場や子どもたちを信じないで、点数を上げるためにはどうすればよいかを考える対策・方法もあります。例えば、点数が上がらなければ不利益を被る仕組みを作れば、それは困るからといってやるでしょう。しかしそれは教育ではないと思うのです。そうするとやはり、先生方は子どもたちを信じないといけないし、教育委員会は先生方を信じないといけない。ただ、信じる以上は、その期待に応えてやっていただかなければなりませんし、そうしていただけることを信頼するということだと思います。だから先ほども申しましたように、目標を共有してもらおう、それが一番重要なことで、そこを共有してもらわないままに結果だけを出そうとすると、おかしいやり方を取らざるを得なくなってしまいます。

これは小学校、中学校の話ですので、取り急ぎ、市町とも連携をし、市町の学校現場の先生方に目標を確実に共有していただいて、先生方が教員としてプライドをもって取り組んでいただけるようなやり方を進めていく必要があると思います。去年から取組に着手したのですから、今年すぐに結果をとという話ではなく、当然、計画も4年で立てていますので、その間にしっかりやっていただいて、県としてそれを支えていくことだと思います。県の役割は、方向性を示し、その目標を現場に共有していただく。そうすると、現場から、これはどうしたらいいんだ、こういうところはどのように工夫したらいいんだという問い合わせや意見が当然あがってくる。それに対して、「こういうところが狙いだからこういう指導をしてください」と知恵を出して真摯に答えていくことにあります。こうした好循環を生み出すために、県教育委員会としても市町としっかり話をして、目標を共有していただくことが肝要だと思います。

三日月知事

私も現場の先生や子どもたちを信じています。いろんなご意見があるでしょうが、もし例えば、学力調査対策のテストみたいなことをやろうというご意見があるとするならば、私はそれは違うのではないかなと思っていますし、もっと本当の意味で力になるような、のちに繋がるような、そういう教育を一緒に作っていききたいなという考え方です。

河上委員

この中にいくつかの県の取組例が書いてありますが、確かにこの授業改善の取り組み内容はそのとおりだと思います。以前の新聞記事で読みましたが、ある県で、このテストは4月21日でしたが、それまでの授業で新しい教科書を開くことがない、そういう記事が載ってありました。もうドリルとか国語の漢字テストとかっていう、そういうことを繰り返して、このテストが終わってから、初めて教科書を開いたというようなことだったのですが、それはやはり、学力調査対策であって、本当の子どもの力を付けるものではないと思います。ですからやはり、今やっている滋賀県の地道なこの取り組みを信じてやっていくべきだと感じます。

また、この総合教育会議でも、ICTのタオさんのお話を聞きました。県内でもそのICT教育に取り組んでおられて、全国でしていただきたい三人か四人の子どもに対して一つの機器があるという状況ですが、草津市では二人の生徒に対して一つの機器があるということを伺いました。やはり、県全体としてもICTの取り組みを少し考えていく方が、今の子どもたちの気質にも、若い先生方の気質にも合っているような気がします。黙々と計算ドリルや漢字ドリルに取り組むよりも、パパパッと展開していく、そういうものはやはり魅力がありますので、その魅力を取り入れない手はないのではないかなと考えます。

土井委員

今、おっしゃったことは私も同感で、特にA問題は、基礎的な知識の定着の問題です。これはやはり算数を中心に繰り返し学習していただく必要があるところです。ただ、この部分を、例えば、教室で先生方が一斉授業で対応するとすると、教室で子どもたちが一斉に黙々とドリルをやり続ける授業になります。しかし、先生方にとっても、「なぜ教室でそういう授業をしないといけないのか」という思いもあるでしょうし、子どもたちにとっても非常に退屈な作業に近い学習になってしまいます。もちろん、作業に近い退屈なことであっても、それを無視すると、やはり学力は身につかないので、やらなければならないのですが、そうすると作業に近い学習をどのようにして面白くするかが重要になります。ICTを活用することって、もし子どもたちの進度に合わせていろんなメディアを使って、繰り返し学習するシステムを導入できたら、おそらく、子どもたちは楽しみながら個々の能力に合わせてやっていけるようになると思います。それに対して、B問題で測られる能力は、単純な作業的学習で身につくものではなく、ICTだけでは対応できないでしょうから、子どもたちと先生が相互作用の中で考えさせたり表現

したりする授業のために時間を有効に使えるようになると思います。今後、そのところをしっかりと考えて、そのために必要な施策に取り組んでいく必要があるだろうと思います。

藤田委員長

先ほど意見の出たICTの使い方について、私も自分の職業柄いろいろな思いがありますが、これはやはり、今の時代に合わせて上手く使っていく要素は非常に多いと思います。なぜなら、インディビジュアルな一人ひとりの子どもに合わせて、教育のコンテンツをうまく考えていこうとすると、ICTは非常に優れていると思います。また、教育によって立派な人材を滋賀県から輩出して、そして社会人としての責任と義務をしっかりと果たしていける人材をつくるということは、学力を高くするということとは必ずしも一緒ではないと思いますが、必要な条件として、一定の知識を身に付けさせるということは大事で、その手法としては、ICTの活用はかなり有効だと思います。そういう点では、例えば先ほど知事がおっしゃった、大きな改善が見られたところとか、あるいはどの程度底上げが進んだとか、あるいはそれに対して昨年の対策がどう改善に結びついたかというのは、ICTの活用で把握ができると思います。

また、地に足をつけて4年計画の中で動きつつあると思いますが、まだ動きだしたところであり、改善傾向にあるという段階なので、これが滋賀県から出てきた人間はすごいなという成果に結びつくには、もう少し様子を見ていかないといけないかなと思います。ただ、先ほどのところにありましたように、やはり改善しようという現場の先生方の意識、先ほど土井先生は信頼関係とおっしゃいました。その人たちの意識が向上しているということと、まだ上向いていないところは、やはり意識はあるのだけれど、まだまだ噛み合っていないところがあるところ、若干、残ってるかなという気がしますので、そのあたり、これからの課題として取り組んでいかなければと思っています。

宇野委員

各論的なことになりますが、今、ご意見いただいたICTもそうですが、今、委員長がおっしゃっていたインディビジュアルということが、これからの教育の一つのテーマになるかと思っています。つまり、一斉にプリント学習させるというふうなことをすれば、子どもたちもおもしろくないですし、その個々の能力に合わせた課題設定というのは難しいです。学習に困難を抱えている子どもに、能力を超える課題をさせ続けることは、その子のモチベーションを更に下げ、伸びるものも伸びなく

なってしまいます。従って、個別にその子の能力を評価するということが大事になってきます。タオさんのソフトもそうですが、ICTの教育ソフトは、その子どもの能力に合わせた課題設定が自動的にできるようになっているものが出てきています。「読み」ということをとって見た場合でも、いたずらに文章を読ませるのではなく、読むための基礎能力が必要です。よく言われるのが、例えば「あ」という文字であれば、それが「あ」という音と一対一で対応しています。これをデコーディングと言います。鳥取県の調査では、デコーディングの困難に伴うひらがなの読みがしんどいお子さんは、小学校1年生で14パーセントくらいいるとのこと。単音さえ読めない子どもたちに文章を読ませるというのは、能力を超える課題を強いることになります。まずデコーディングがしんどい子どもさんをピックアップして、その子たちにデコーディング指導ということをすることによって、『あ』という文字が『あ』という音と対応しているということを教えて、そこから単音や特殊音節、さらには単文という形で指導をし、読めるようにしていかないと、この子どもの学習意欲や学習能力が育めなくなりますし、さらには二次障害を起こしてしまうことも懸念されます。

従って、学校の先生方に、教育理念とともにそういう子どもさんたちの育ち、学び方の特性がどういうものかを知っていただいて、早期に子どもさんたちの特性を理解して、できるだけつまづきがないように教育をしてあげることがすごく大事だと思います。これはもちろん算数についても、色の弁別ができることであったり、まとまりを理解することとか、マッチングとか、様々な算数の土台の能力があります。それを本来は就学前の遊びの中できっちりと押さえていかないといけないことなのですが、小学校でもそれが十分できていない子どもが一定数います。まして中学であれば、小学校段階でつまづいている子どもはたくさんいます。ですからインディビジュアルに対応していくということは、非常に大事なることかなと思います。

河原教育長

別の観点ということになりますが、今回、学ぶ力パワーアップ事業と、そして放課後の取り組みの事業を報告いただきました。それぞれの事業をやった中で、やはり非常によく分かる、見えてきたのかなと思っております。9ページで言えば上向いた要因ということで、2つの小学校、2つの中学校について書かせていただきました。それは上のグラフの中の45パーセント以上、または35ポイント以上上がっているという学校です。中学校の場合も、右側の二つ飛び出している学校です。やはりこれを見ますと、例えば、一番上のA小学校では、まず結果をしっかりグ

ラフ化して分析したことで、子どもたちの学ぶ力の低さが実感できたということです。更にはその次の部分ですが、教員と児童の意識が一致したことで学ぶ力が上がった。教員同士もそうですが、やはり子どもと一緒に頑張って頑張ろうということができたのかなと思います。そしてその次に、B小学校では、基本的な生活習慣が整い学習規律が改善されたということです。やはりここも、当たり前といえば当たりの学習指導ができたことが改善につながったのかなと思います。また、その横にパワーアップ事業により、少人数のきめ細やかな指導が功を奏したということも書いてあります。やはり先ほど言っていたように、一人ひとりに対応できたのかなと思います。そして最後、D中学校のところですが、パワーアップ事業で、基礎・基本が定着してきたという、一番根本の部分が出来たのかなと思います。

もう一つは、放課後の場合は、また観点が全く違いますので、中身は違いますけども、それぞれやはりしっかりと子どもたちが勉強できるように取り組んでおられたのかなと思います。ただ一番下に結果が伸びなかった要因ということが書かれておりまして、あまり効果が上がっていないところです。やるべきことも分かっているんですけど、やはりそれぞれの学校の困難な部分があるということが、ここからは伺えます。やはり教育委員会としてこういう困難な状況にある学校に対して、何をどう支援できるのかを、更にしっかりと分析・検討をして対応していかなければならないということを、すごく感じました。

三日月知事

私、今、お話しを伺いながらこの資料を見ていて注目している言葉があります。一つは、例えば8ページの正答率が高い県内市町の取り組み例のCの「ICTの導入」です。やはり資料提示やノート指導の点で効果があったのではないかという、こういう見方ですね。やはり個別指導。インディビジュアルな部分が充実していることの要因があるのではないかということ。あと、その上のAの「小中連携」。この小中連携というところに、例えば、9ページのD中学校で、小中が連携しているという、下から二つ目です。私自身の経験でもありますが、やはり中学校に行くところとちょっとまた勉強の仕方が変わりますよね。だから例えば、こういうところにもう少し、今後の滋賀の教育を考える一つのポイントがあるのかなと思いました。

是非、今回、より深く分析しながら今後の対策を取っていきたいと思いますし、お陰さまで昨年よりも更に踏み込んだ分析を今、やり始めていただいておりますし、早速市町や現場との、どこが課題でどんなこと

やったらいいのかという、こういう話し合いをやっていただいておりますので、是非また教育委員の皆さま方も更に現場等でご確認をいただいて、いろんなご提言等をいただければと思います。このことを議論していたら2時間、3時間あっという間に過ぎてしまいますので、もしよろしければ次のテーマをご提示いただければと思います。

司	会
---	---

ありがとうございました。知事がおっしゃったように、これから教育行政を考えるに当たっても、やはりもう少しデータを大事にしながらその分析をして、行政施策を考えていくということに取り組んでいきたいと思っています。この学ぶ力だけではなくて、他の分野にも取り組んでいきたいというふうに思いますので、是非、事務局としては対応できるようにしたいと思います。

それではこの学ぶ力、今、小中学校が議論の中心になっておりましたが、今年度、次年度以降に重点的に講ずべき施策を総合教育会議で考えるという中で、高校あるいは英語といったテーマ。あるいはその職員、指導する教員ですね、そのあり方なども含めながら議論していけたらと思っています。これにつきましては学校教育課と教職員課の方から、簡単に話題提供として、資料の説明をしていただきたいと思います。

6 次年度以降重点的に講ずべき施策について

学校教育課長 (資料2に基づき説明)

教職員課長 (資料3に基づき説明)

司 会 ありがとうございました。前回も知事から6つの宿題をいただきましたが、それについては今、鋭意考えておりますので、それ以外の議題ということで今日、二つ挙げさせていただきました。それぞれの課の方から現状の認識と課題をどのように捉えているか、またそれを皆さんで共有して、そして事務局として今、考えている方向性を挙げております。特にこの「人」については、教育、教え育てるということの一番基本になることでもありますし、また高校教育は、先ほど小中については市町との連携という話が出ておりましたけども、県立ということで、県が自らやっていかないといけない部分であるかと思えます。このあたりについて、意見交換をさせていただければと考えております。

三日月知事 前半の詳細精緻な分析結果の発表と議論に比べますと、大雑把な説明だったかもしれませんが、これは別に担当部局で、私も含めてこうあるべしということではなくて、少し課題認識と今後、変革、改革、対策の方向性を示して皆さんで議論しようという趣旨で今日は出してもらいました。いずれにしろ、県の教育委員会ですので、高校教育をどうするかということと、やはり人が教えてくれることですので、人材、教職員の採用と育成をどうするのかという、この2つのことに問題意識があったので、少しご議論いただければと思います。

藤田委員長 大変重要なテーマを出していただきました。これからの日本、未来に向けて今後、大変重要な教育テーマになってくると思います。一番初めの学びの好循環というところで、特に英語を一つのコモンランゲージのように使っていく時代になりましたので、これに対しての一つの考え方としてちょっと私の意見を申し上げます。

今の説明の中で、特にグローバル人材の育成の背景については、説明いただいたとおりだと思います。そういった意味で今のフラット化する社会とか、世界が以前よりも近くなって、一層グローバル化されて、イ

ンバウンド、アウトバウンドともに非常に行き来が激しい時代になっています。そういうことを考えますと、アジアというのは、立地上、日本から見たら営業圏になっていると思います。立地上、例えば、昔だったら島根県から東京に出張します、あるいは九州に出張しますと、その感覚に近くなっていると思います。

そういう変化の中にありながら、では将来の日本にいかに関民の責任と義務をしっかりと果たしていく人材をつくり出すかということですが、一番大事なことは、従来の伝統的な知識偏重の授業という指摘がありましたが、知識の伝授は必要条件として、必ずやらないといけないと思います。英語の能力がどれだけ高いかというと、要するにボキャブラリーの数よりもソーシャルスキルが高い方が、絶対に勝つのだろうと思います。いくらボキャブラリーがたくさんあったって、使いこなせなければどうにもなりません。実はそういう意味では、おそらく、従来の知識の必要条件に加えて、知識の活用力やソーシャルスキル等の獲得というように、必要な能力の条件の拡大を図っていかない限り、有能な人材はできないと思います。

そういうことを考えますと、「国際人としての日本人」というものをつくらないといけないと思います。国際人としての日本人、それはここに書いてありますように、アイデンティティーが重要でありまして、これが高いか低いかによって「国際人としての日本人」となれるかが分かります。もし語学だけができたとして、皆さんも知っているシリコンバレーを例にとります。シリコンバレーにどれだけの日本人が行っているか、それでどれだけ日本から優秀な頭脳の流出が起こっているかということを考えますと、極端に言えば、あの人たちは、英語さえできなければ日本にいるはずの人たちかもしれません。たまたま英語ができるがゆえに、日本から頭脳の流出が行われているわけです。もしアイデンティティーがしっかりしていれば、それはつまり自分という人間の精神が帰属するところが日本ですということがよく分かっている人は、アイデンティティーが高いのだと思います。そういうアイデンティティーがない人に、変に知識だけが増えてしまうと、あまり適切な表現ではないかもしれませんが、シリコンバレーにもインテリプアーがたくさんいます。インテリジェンスが高いのにプアーだということです。その人がちょっと英語がよくできて、ちょっと優秀な大学を出て、ちょっといい技術を持っているから、皆、海外へ出て行って、結局は何をやっている

のかわからなくなってしまうということがあります。英語を教えたことがその人の人生にとってプラスだったのだろうか、ということが私の知る限りでも実際にあるのです。では、その人には何が足りなかったのかというと、それはアイデンティティーなのだと思います。さらに、外国人と議論しますと、外国人は自己主張が極めて強いです。そうした中にいると、日本人は謙虚さを美德としているので、わび・さび、あるいは謙虚さ、そういうものを美德としていると、埋没しそうになります。

しかし、アイデンティティーがしっかりしていると、ぶれない人間になると思います。それはもう絶対にやっておかないとダメだと思います。単純に英語ができる人を育てて、頭脳の流出が大量に起こってしまったということになってしまわないようにすることが大事だと思います。そういう意味では、国際人としての日本人とは、どうあるべきかということ、やはり温故知新のような中からしっかり見つめておくということが、グローバル人材を作っていく大事な要素だというのが私の考えです。

そのためには、昔から教師像とは？ということ、これはもう古くて新しいテーマですが、これはおそらく、不易流行的なもので、本来は理想的な教師像は、そう変わらないと思っています。ただし時代とともに生きてくための先生の素養として、今の時代感覚をしっかり持つということが必要です。こういう部分を重視して、若い世代の優秀な人材を確保していくことが、先ほどの国際人としての日本人を養っていく、そのための教師とはどういう人なのだろうということ、やはりしっかり考えていくことが大事だと思います。偉そうなことを申しましてすいませんが。

土井 委員

この高校教育の問題について、話せばいろんなことがあります、二点だけ申し上げます。一つは今回の教育改革は外在的・社会的な問題に起因している部分があると思います。高度成長の中、人口が増え続けた時代において、何が行われたかと言えば、たくさん子どもたちに競争させて、そしてその競争に勝ち残った子たちが全体を引っ張っていく。その象徴が入試だったわけです。このやり方は、人口規模がある程度あって初めて取ることが出来ます。ところが少子化が進んでく中で、このやり方は効かなくなってきました。そこで、全ての子どもたちを対象に、きめ細やかな教育をして、それぞれに応じた能力を身に付けさせて、活躍してもらわない限り、きたる少子化の中で日本社会が生き残る道はないだろう、そういう選択の問題なのです。

そうしますと、知識か思考力・判断力かという問題設定もありますが、さらに重要なのは、今までの教育は、学習指導要領もそうでしたが、学校の先生方が授業で何を「教える」という観点から組まれてきたのです。しかし、今回は、「先生が何を教えるか」から、「子どもたちに何が身についたか」にシフトするということを意味します。1時間の授業でこれを教えろといわれれば先生はそれを話すことはできますが、しかし、それが子どもたちに身についたかどうかというのは分からない。そうにも関わらず、これまでは、次の授業時間になれば次の内容を話さなければならぬということをやってきたわけで、一斉授業はそれを前提に行われてきたのです。

それに対して、一人ひとりに応じた教育を行い、全体を底上げして、皆で頑張っていく体制をつくろうとすると、一人ひとりに何を身につけさせるのかに注目しなければなりません。今回の教育改革の重要な眼目はここにあります。

先ほど小・中学校のところでも出ましたが、高校については、やはり小学校に比べると学力の差が出てきますので、子どもたちに沿った教育目標、それから実際に達成度を勘案して、より一層きめ細やかにやっていく必要があります。子どもたちが将来にどのように繋げていくのかを考えることが大切だと思います。

繰り返し申し上げますが、かつて大学入試が機能していた時には、大学入試でなんとかなっていました。ところが今、大学入試による選抜機能が全体的に低下してきていますので、その結果、学力の二極化が生じています。未だ上位校といわれる、偏差値の高い大学に向けて一生懸命勉強をしている子どもたちと、もう勉強はいいやと思っている子どもたち、その二極が進んでおり、決して良い状況ではありません。

そうしますと本当に教育で子どもたちの意欲を高めて、彼ら自身、彼女たち自身が目的意識を持って学習に取り組むようにしないといけません。これは高校教育において非常に大きな舵を切ることになると思いますし、滋賀県が出遅れてはいけないと思います。むしろ、人口問題への対応とも連携して、率先して取り組むべきだと思います。その関係で、人材育成は、若い先生方が増えるということについて心配もありますが、教育が大きく変わるということになると、やはり彼ら、彼女たちに期待するところも大きいのです。若い力で新しい取り組み、努力をやってもらう必要があります。考える力を身に付ける教育をしようとする、子どもたちにも考える力を身に付けさせないといけません。当然、先生方が自分の授業の実践の際に考えてもらわなければなりません。そのために、若いパワーをどう導いていっていただくのかということ、

今後、詰めていただくことになると思います。いずれにしましても、共に重要な課題であるので、是非、取り組んでいただきたいと思います。

河上委員

先日、夏休みに総合教育センターで、2年目の中学校の先生方が教科ごとに分かれて研修をされていたのに参加させていただきました。今まででしたら、一人の講師がずっと喋って、皆が聞いているというような研修でしたとおっしゃっていました。皆さん、この日は教科ごとで5、6人ずつに分かれてグループトークをされていました。これから目指すアクティブラーニングを、自分たちが先に実践されてるという、そういう感じで自分が学校で工夫してることについてプリントなどを持ち寄ってグループトークされていましたが、本当に皆さん、すごくキラキラした目をされていて、やはりこれからこの人たちを活かすも殺すも同じ学校におられる先輩の教師の方だと感じました。誰もオールOKな人間なんていないと思います。先生方もそうだと思います。特に私が感じますのは、小学校の場合、全部の教科を教えないといけないし、朝から子どもたちが帰るまでずっと子どもたちと接していかないとはいけません。担任一人が背負う部分が大きすぎると思います。先生方の得手不得手もあると思いますので、それぞれの専門や得意な教科を活かし、自分たちの持っておられる力が十分に発揮できるような、チームとしての組織で動いていかれるといいと思います。そうすることで、子どもたちの成長にすごく喜びを感じて、教師としての生き方に、もっともっと力が入るといような、そういう循環になっていくと思うのです。その時、皆さんに、5年目も10年目も、そういう顔でいてねと言いました。段々しょぼんとなっていかないように、皆さんにお願いをしました。本当に皆さん、いい顔をされていたので、とても希望が湧きました。

佐藤委員

今の河上委員のお話を聞いて思ったのが、まさしく企業、産業界もそうだなということです。人材育成ということに関しますと、教育だから、学校の先生だからどうだということではなくて、オールジャパンといえますか、いろんな業界での共通課題だということを感じました。さっきの資料で、いわゆる成績、点数が悪かったというところのアンケートの伸びなかった要因の中に、生徒指導で困っている、いわゆる生活習慣であるとか、そういったものが乱れていると書かれている学校がありました。そこがすごく気になりました。

先生方が頑張っている、子どもたちも頑張ろうとはしているが、なんとなくその頑張る部分が、生活習慣の乱れなどで、手こずってしまっているということは、そこさえクリアできたら次につながるのかなと思います。

ます。先ほどの話で、若い先生方が目をキラキラ輝かせていたということですが、こういう目標を持って私は教員になったので、こういうことがしたいということがあると思います。企業もそうで、新入社員が希望や目標を持って入ってきますが、現実はなかなかそうではなくて、段々、責任をとらされるような立場になってしまうので、なにかそういう若い人たちへのフォローアップ体制というか、先生方とPTA、あるいは他校の先生方も含めて、そういう仕組みが出来るといいなと思いました。企業もそうですが、いわゆる異業種交流をよくしますけれど、学校の先生が例えば、我々企業が入っている異業種交流に来られることはあまりないと思いますので、なにかそういうようなことがあってもいいのかなと。決して企業も、利益追求だけではなく、やはり地域をより良くしたいという思いがあるので、そういう部分でも、滋賀らしさといいますか、滋賀県で特徴的に取り組んでみてもおもしろいのかなと思いました。以前、台湾に行った時に、台南市の市長さんがおっしゃっていたのですが、「教育は人格をつくる、それが国力になるんだ。」と。日本の教育システムは素晴らしいので、それを大いに学んで取り入れているのだとおっしゃっていたのが、非常に印象深くて、市長もそうおっしゃっていましたが、バスガイドさんも、通訳の女性の方も同じようなことをおっしゃっていたのです。日本の教育システムが素晴らしいと。でもこれを活かせる仕組み、体制というか、簡単にいうと連携をとって皆で一緒にやりましょう、子どもたちのために一緒にやりましょうという、なんかすごくシンプルな我々の姿勢が、もう少しあってもいいのかなという気がしました。あと外国人観光客のことですが、年間数十万人の方が滋賀県に来られていますよね。それだけの数の方々が泊まっていらっしゃるわけです。そういう方が集まるところにもう少し子どもたちが来て、通訳なんかをボランティアでやってくれれば、1カ月くらいでペラペラに喋れるのではないかなと。さらに我々も助かりますし。なにかそういう交流なんかもいいかなと思います。今、ロータリークラブで交換留学生の受け入れをしまして、教育委員会にもお世話になっていますが、その子もたった1週間で、随分日本語が喋れるようになってきて、そういう環境におかれると否応なく覚えざるを得ないんでしょうね、きっと。結局そういうことではないかなと。本当に問題解決というのはシンプルなことだと思うので、留学に行かなくても、もう少し滋賀県の外国人観光客を使うという手もあるのかなと。英語力も伸びますし、外貨の獲得もできますので、そんな取組もおもしろいかなと思います。

宇野委員

最近よく言われているコンピテンシーとか、世界に通用する国際人を

育てるとか、コミュニケーション能力であつたりとか、ソーシャルスキル能力であつたりとか、こういったものが取り上げられるようになってきたのは、社会の教育に対するニーズが変わってきていることが背景に存在していると思います。ソーシャルスキルトレーニングというのは、私たちも医療現場で十数年前から開始しましたが、当時はさほど認知されていませんでした。最近では、中学の教科書の中にもソーシャルスキルに関する記述はたくさん見られるようになりましたし、高校現場でもソーシャルスキルトレーニングが行われていますが、ややもすると、マニュアルになってしまう傾向があります。また、ソーシャルスキル、あるいはコミュニケーション能力が低いとその人の評価が著しく低下する風潮が一部にあるかなと思います。私が診ている子どもさんたちは、もともとソーシャルスキルが身につけにくい子どもなので、非常に生きづらい世の中になっているという側面はある課と思います。

共生社会や多様性の重要性が話題になりますが、コミュニケーション能力も積極的に自分から他者と関わりながらディスカッションしていくことができる人もいれば、あるいは受け身でしか関われないものの、他者となんとか調和しながらやっていく人もいていいわけですね。また、英語が話せて国際的に活躍する人ももちろん必要ですが、地域で地道に生活をされる方も、これが決して価値がないことではないことは言うまでもありません。

高校教育の話では、学力の高い子どもたちだけを焦点にして話をさせていただくと、ちょっと偏差値の低い子どもたちが相対的にしんどくなるということが、今までもあったと思いますが、新しい教育の形になった時も、おいていかれるようなことがないようにする必要があると思います。学力が高い・低い、国際的に活躍する・地域と共に生きていくなど、多様な人がいて社会は構成されているのであって、英語ができる、コミュニケーション能力が高いというのが人の価値を決定するものではないということを十分理解して、多様な教育プログラムを構築する必要があるかなと思います。

河原教育長

教育は大変重要であり、大変難しいとも思います。ただこれからの教育は、子どもの力を伸ばすということだけではなく、やはりその地域をどういう具合に考えていくかというようなこと、そこへどれだけ貢献できるか、その中でどう働くかということが、大変重要になるのではないかと思います。そういう意味で、いわゆる協働して何かができるような、そういうような組み立てをしっかりとしていかないとダメなのかなと思います。

特に、高校教育の改革、先ほど課長が、英語を例にして話をしてくれました。本当にできる、できたというような実感をもつことで、意欲を向上させ、そして更に自分でまたやる、それだけではなくて仲間と一緒にやるというような、こういう組み立てをしっかりとしていかなければならないのかなと思います。しかも高校教育を変えるということは、滋賀県の場合は、小中学校の教育、ここから学んで変えていくということもありますし、逆に小中学校へ発信をしていくということにもなるので、やはり県立の学校でどのように学びを変えていくかということをしつかり考える必要があると思います。そして先ほど宇野先生が言っていたように、このシステムがいわゆる偏差値の高い学校だけではなくて、本当にどんな学校でも機能する、そういう方法も絶対あるはずですし、そこをしっかりと見極めながら進めていかないといけないと思っています。

三日月知事

ありがとうございます。高校教育に関し数点、私の考えを申し上げます。宇野先生や皆さんがおっしゃったように、単なる入試対策の教育にはしたくない。そして実はこの協議をする前にも申し上げていましたが、偏差値の高い上位校のためだけの高校教育改革であってはならない。是非この分析をする時に、滋賀の高校の現状を見ようと。滋賀の高校に行っている子どもたちがどんな状況にあるのか、それぞれの学校がどうなのか。これはできれば私立も含めて見た方がいいと思っています。その時に、藤田委員長もおっしゃってくださいましたが、やはり滋賀らしさってどこにあるのだろうか。教育大綱をまとめて、「近江の心」という言葉を入れましたが、そういうことをもう少し追求したい、大事にしたいなと思っています。

更には、滋賀の高校教育の強みはどこにあるのだろうか。これはやはり社会人と大きく接してきましたが、例えば、商業高校、農業高校、工業高校が産業人をつくってきました。かつて他県よりもその力はあったと思うのです。18歳から選挙権が認められるようになったということを受けて、滋賀の高校教育をどうするのか。私、英語教育は大事だと思います、が、英語だけでいいのかと思っています。これを公教育でやることにはいろいろと弊害があるかもしれないし、議論を呼ぶかもしれませんが、滋賀の高校では中国語をやっていると。例えばですよ、こういうことを例えば、湖南省と連携してやるということがあってもいいのではないかなと。是非、高校に林業科、できれば琵琶湖科みたいなもの

を設けて、やはり滋賀の学校を見てみると、琵琶湖のプランクトンのことから水質のことまでよく知っているなど。そこから繋がって、土のこととか木のこととかよく知っているではないかという、なにか新しい学科なりを設けることができるのかできないのか。やはり私、高校総文のレガシーを活かしたいのです。9年後に国体をやれるというこのタイミングも活かしたいのです。従って、スポーツと文化ということをもっと追求したい。

先ほど高校改革の資料の一番下の学校体制の変革の部分に、「校長のリーダーシップのもと目標達成のために、全職員で取り組む学校の体制づくり」と書いてありますが、私、これ自体は否定しませんが、私が生徒なら、必ず先生に噛みつきますね。生徒も入れてくれと言って。もう高校生ですから、生徒も一緒に学校体制の変革を行うという、そういう滋賀らしい高校変革を展望したいなと思います。

教職員人材のことについては、私、ものすごく危機感を持っています。せっかくなってくださった先生が、ちょっと力なり意欲を失っていらっしゃるのではないだろうか。河上先生がおっしゃったように、このままでいてね、ということもしかりですね。私、是非、待ちの姿勢ではなくて、「滋賀で一緒に先生やらへんか」と、「滋賀で一緒にこれからの教育をつくらへんか」という、待ち受けではなく、我々が出張って行って、これから教員採用試験を受けようとする人たちに呼びかけたいな、呼びかけてはどうかと思っています。例えば、藤田委員長にDVDに出ただいて、佐藤委員と一緒に滋賀県の教育委員会ではこんなことやっていますというのを、一緒に訴えかけていく。これからは多分、人の取り合いになると思いますので。滋賀県では学ぶ力の向上をやっています、どうか来てくださいと、こういう外に出て行く教職員人材確保を、是非、皆さんと一緒につくっていききたいなと思っていますので、また一緒に検討していければと思います。

司 会

ありがとうございました。そろそろ時間が迫ってきております。今日ではできるだけ皆さんに意見を述べてもらう時間をとろうということで、こういう形でやらせていただきました。最後に、まだ言い足りない、もう一言いいたいという方おられましたら。

藤田委員長

どれもこれも重要な課題ばかりの議論なので、これで全てが見えて

くるということではないと思いますので、やはりこういうことをきちんと、皆でやっていくってことしかないと思いますね。

三日月知事

その際に、今日は教育委員会だけではなく、職員の皆さん、事務局の皆さん、たくさん来てくださっているので、おそらく、「ちょっといいですか」と質問したい人もいらっしゃる、意見を言いたい人もあったと思います。僕から呼びかけたいのは、いろんな課題、今日、いろんなご意見いただいたので、どうかこれを施策の中に、もしくは予算の中に、よし、あんなことを言ってくれた人がいたから、ちょっとこういう事業をやってみようとか、予算要求もシュリンクするだけではなくて、チャレンジ精神を持ってやっていただきたいなと思います。子どもたちにチャレンジ精神を持とうといっている教育委員会が、なんかもう現実的なことばかりやるということではなくですね。こんなことって知事、認めてくれるのかと言われると困るのですが、ちょっとこの機会に、いろんなことにチャレンジする教育委員会に、河原教育長と、一緒にしていきたいなと思いますのでよろしくお願いいたします。

藤田委員長

最後に、昨日、養護学校にふれあい教育対談に行ってきました。やはり大事なのは、先ほど、河上さんがおっしゃったように小学校、中学校、あるいは養護学校でも、この子たちになにか夢を持たせることだと思います。夢に向かって頑張る子たち見ていると、将来が楽しみだなという子どもたちをたくさん見ていると、なんとなく嬉しくなります。いや、大丈夫かなこれと思う子ばかりだと、ちょっとこちらも考え方を変えて、なんとか元気にする施策をしないといけないなと思いますが、でも、中学に行っても高校に行っても、そういう人がやはりたくさんいてくれるのでね、この子の将来は期待できそうだなと。期待が感じられる子どもたちをたくさんつくるということが大事だと思いますね。

司会

最後に知事から何かありますでしょうか。

三日月知事

いえ、私が言いたいことは全て言いました。

司会

ありがとうございました。大変長い間、貴重な議論をいただきました。この総合教育会議は、一つずつ細かい議論はできませんが、今日もいろんなヒントがあったと思います。事務局の方でも、知事の言葉にもあり

ましたことを踏まえて、是非、要求はいっぱいさせていただこうといったことで、取り組んでいきたいと思います。次回ですが、今回、初めてゲストを呼ばずにやりました。できれば外の人をもっと呼びながらやっていけたらなと思っておりますし、また次回以降、また皆さん相談させてもらいながら進めていきたいと思っております。特に、これまで福祉部局の案件を中心にやっていますが、他の部局との関連も当然あるので、特にこれからだと職業人材のことも含めて検討してまいりたいと思っております。次回は11月6日を予定しております。もともと予定された特別支援教育をテーマにさせていただくのと、今申しました産業人材のこともちょっと考えたいなと思っております。まだ確定ではありませんが、また調整をしていきたいと思っております。それでは皆さん、大変貴重なご意見をいただきまして、どうもありがとうございました。
